

ここも七十九句と同様に京都の風俗風習と全く異なる太宰の地の様子の実景を描写することに力点があるのではなく、京の文化が太宰の地には全く及んでいないことを中国古典籍の詩語を借りて繰り返して述べているところと解する。



補説①

○75、76句目「魚袋出垂釣／箒篁換叩舷」について

この二句の解釈について、元熊本大学 金原理教授より次のような貴重な教示を得た。金原教授の原文のまま引用する。

本書の初版では、75句（役人はだらしなさに）魚袋を魚籠びくに見立てて腰にさげ、釣り糸を垂らしている有様だし、（76句）箒篁を（用途を違えて）舷を叩きながら唄を歌う時に使うものとして代用している。と訳してあるが、これでは両句とも意味をなさない。

75句 魚袋は魚籠の代用になるほど大きくないはず、たとえば国会議員のバッチのようなものであるから、「魚袋出」とは、そのバッチをみせびらかして中央での権利をちらつかせること。「垂釣」とは魚を釣るといふ表現を比喩的に使つて、権勢に縋すがりたい地方の豪族を釣上げるの意味に換えている。

76句「箒篁換」とは都での牛車の生活を舟に乗る生活に換えるという意味で、「箒篁」で舷を叩くのではない。「換叩舷」は川口注の補注四一に引かれている「楚辞・漁父の『莞爾而笑、叩枻而去』」を受